

19章

陸前高田市における復興まちづくり

—世界に誇れる美しいまちに—

戸羽 太

19-1 被災状況

岩手県陸前高田市は、東日本大震災の被災地の中でももっとも甚大な被害を受けた場所である。まさに壊滅的という言葉がぴったりであろう。市内の市街地が波によってえぐり取られてしまった様子は、被災後、たびたびメディアで取り上げられてきた。

被災以来、1,555名が遺体で発見され、2012年8月現在も250名以上が行方不明となっている。現在も毎日捜索が行われているが、ここ数ヶ月は誰も発見されていない状況である。

人口2万3,000人の小さな街であった陸前高田市は、被災後、市外への人口流出が進み、2万人程度に縮小してしまった。

被災後、私が真っ先に思ったのは、「この震災も1年すれば忘れられてしまう」ということだ。日本人は、災害が起こると一時的には大騒ぎするが、しばらくすると忘れてしまう。



写真1 奇跡の一本松

他の地域で同じような災害が起これば、大衆の興味はそちらに引きつけられてしまうだろう。しかし、陸前高田市の被害を見れば、「細く長く」ご支援いただかなければならないのは自明である。だから私は、「忘れないでください」といって続けてきたが、その甲斐虚しく、現在はよほどのことがなければ、被災地のことは報道されていないのが現状である。被災地では2012年度を「復興元年」としているが、関西、東京などでは「忘却元年」となってしまうている。

表1 津波被害状況

(1)被災戸数

区分	戸数	備考
全壊	3,159 戸	
大規模半壊	97 戸	
半壊	85 戸	
一部損壊	27 戸	
計	3,368 戸	

(2)被災世帯数

区分	世帯数	備考
総世帯数	8,068 世帯	2011年1月31日現在
全壊	3,803 世帯	2011年6月21日現在
大規模半壊	118 世帯	
半壊	116 世帯	
一部損壊	428 世帯	
計	4,465 世帯	

(3)人的被害状況

項目	人数	備考
人口（住基人口）	2万4,246人	2011年3月11日現在
生存確認数	2万2,069人	2012年8月1日現在
死亡者数（震災分）	1,727人	市民で身元が判明、または死亡認定として死亡届の出された人数
死亡者数（その他）	417人	病死、事故死など
行方不明者数	18人	安否確認要請のあった人数
確認調査中	15人	

1 復興をめぐる混乱

このような悲劇的な状況においても、復興は進められなければならない。私は、2011年3月から1年5ヶ月の間、災害と戦ってきた。その間、被災地復興に関して多くの混乱があった。私はその中でも国との関係を取り上げたい。

被災地復興でもっとも大きな問題は、日本の仕組み自体にあるといってもよい。極端に言えば、復興に関しては、目指す山、ゴールは一つなのである。しかし山を登ろうとしたときには、多くの障壁がそれを阻んでくる。この障壁は、人間が設けた障壁、つまり法律や規制などである。実に1年5ヶ月もの間、陸前高田市は、これらの障壁によって苦しめられてきた。

例を挙げよう。被災当時、1,000を超える遺体が引き揚げられ、市内の小中学校の体育館は遺体でいっぱいになった。家族や友人たちは、身元確認のために遺体の安置所に行く必要があったが、市内ではガソリンが手に入らず、移動がままならない状態であった。そこで陸前高田市として、国にガソリンの支援を要請したのであるが、「道の状況が悪くて行けない」と断られてしまった。

「ガソリンがないわけではないが、道の状況が悪くて」と国はいう。しかし実際には、九州から自動車支援に来てくれている人もいたのであるから、道の状況が悪かったとは思えない。もしガソリンが手に入らないなら、近隣諸国に要請するなど、方法があったのではないだろうか。

後日、ある議員が被災地視察に来た際に「ガソリンが欲しい」と頼んだところ、その場で経済産業省にかけあってくれた。そのおかげで、ようやくガソリンが手に入ることになった。ガソリンスタンドがないため、ドラム缶を使った配給である。ガソリンの輸送・配給は危険を伴う任務であるため、被災地に駐在していた自衛隊にお願いし、とうとう明日ガソリンを配給できるというときになって、経産省が突然電話してきて、こういった。「ガソリンを自衛隊には触らせるな。これは経産省の出したガソリンだから、自衛隊に給油させるな」。



写真2 開発予定地

この非常事態に、このような言葉を聞くこと自体に、私は呆れてしまった。

もう一つ例を挙げよう。現在、陸前高田市の北側の山を削って、消防署や公営住宅を建てる計画がある。

この計画は2011年10月に決定されたものであるにも関わらず、今も石ころ一つ動かせていない。

木を伐採するには申請が必要だ。切り開く面積が多いので開発行為にあたり、これもまた申請が必要だ。津波復興拠点整備事業として復興交付金を受けようと思うと、都市計画決定が必要になる。これだけでも大変な手続きであるが、今度は林野庁から連絡が来て、「その山には我々が補助金を出している。切り開くには手続きが必要だ。6ヶ月待て」といわれてしまう始末である。さすがに半年は長すぎる、とこちらが文句をいうと、「では2、3ヶ月だけでいい」と返ってくる。2、3ヶ月でも長い、と試してみると、「では2週間待て」といわれ、半年かかるはずだった手続きが、何とたった2週間で終わってしまう結果となった。

恐らく、平時の仕組みで申請すると、すでに受け付けられた案件が山のようにあって、その一番下に入れられてしまうから、その案件の処理に6ヶ月もかかるのであろう。しかしこれは平時ではなく、有事である。もう少し頑張ってくれてもよいのではないか。

2 復興のビジョンの欠如

これは未曾有の大震災である。「東日本大震災は、千年に一度の大災害」とよくいわれるが、「千年に一度」という言葉を使うなら、「千年に一度」のルールに変えなければ、現場は立ち往生してしまう。災害に臨機応変な対応ができないのは、日本が有事の対応、すなわち「国を守る」ということを、おろそかにしてきた結果である。

未曾有の大災害に襲われ、復興が急がれる今、現場でもっとも求められてい



写真3 被災した市庁舎



写真4 被災した市民体育館

るのは、これからの日本がどうなっていくのか、どう変わっていくべきなのか、というビジョンである。めまぐるしく変わる政局に翻弄される今の日本には、そのビジョンがない。しかしビジョンがなければ、復興などできるはずがない。

「復興」「復興」とみな口々にいう。しかし現実には、復興の「ふ」の字もない。被災から1年5ヶ月経った今、陸前高田市では、全壊した公共施設を撤去する段階である。これはいくら何でも遅すぎる。もし東京、大阪、名古屋などの大都市が被災したとしたらどうだっただろうか。1年も経ってそのような状態だっただろうか。私は、被災地が東北の田舎だから、みんなのんびりしてられるのだと思う。

東北の人々は、確かに「田舎者」かもしれない。しかし「純粹」に、魚を捕り、米や野菜を作って生活してきた。東北地方で採れる食材は、日本を代表する食材である。我々は所得は少なくとも、食料供給基地として日本において重要な役割を担ってきたはずだ。一体、政府は何をしているのだろうか、私は問いたい。

19-3 | 復興最前線

1 市長として復興に挑む

私は、東日本大震災の1ヶ月前に市長になった。就任から1ヶ月も経たないうちに、このようなことになってしまい、新参者が復興を行うという何とも頼



写真5 住民説明会

りないことになってしまった。さらに、東北地方は若い首長が少なく、46歳の自分が東北では一番若い。「頼りない」に「頼りない」が重なって、市民のみなさんは不安だったであろう。このような中で、復興の判断をしていくのは、大きなプレッシャーであった。

そもそも「判断」というものは普通、客観的なデータを根拠にして行うものだと思うが、今回の震災では「判断」をするために参考になるデータや事例がなく、すべてがある意味「賭け」になってしまっている。この街をどうしていくべきなのか、考え、判断することは、至難の業であった。

陸前高田市は、被災以前からたくさんの問題を抱えていた。まず、働く場所がない。大学がない。若い人達は、仕事や教育を求めて、仙台、東京に行ってしまう。多くの若者が市外に出て行ってしまい、帰ってこない。この問題は、被災地の多くに共通する問題であろう。復興時には、この問題が重くのしかかってくる。

また復興の過程においては、住民の意見を取り入れることが望ましいが、住民が100人いたら100通りの意見がある。市と県が合意に至っても、一部の住民が反対し、それをマスコミが取り上げてしまうことで、合意を何度も白紙に戻さざるを得なくなってしまうことがたびたび起こっている。また、市が提供する情報が住民に行き渡らず、市と住民の関係が悪化してしまうこともある。復興のスムーズな流れの中で、どのように住民の意見を取り入れ、住民に情報を発信していくかは、非常に悩ましい問題である。

2 みなさまのご支援とご協力を実現したこと

このような困難の中で、私が心がけたのは、「自分にできないことを自覚し、できる人を呼ぶ」ということである。人を上手に頼ることと、多くの方のご協

力が、自分と陸前高田市が今まで何とか頑張れた秘訣だと思う。

被災直後から、日本各地、世界中から多くのご支援をいただいた。一般の方々はもちろん、企業や様々な業界の専門家の方々にご協力をいただいていた。この項では、その一部をご紹介させていただきたい。

2012年8月現在、陸前高田市内をボランティアとして訪れた人は、陸前高田市ボランティアセンターを通したもので、11万人を超えている。しかし、市内は壊滅的な状況なので、宿泊施設がなかったため、岩手県一関市一関駅近辺、奥州市水沢江刺駅近辺に宿泊してもらい、毎朝一時間以上かけて陸前高田市に通ってもらっていた。これは非常に能率が悪く、こちらも心苦しい思いだった。

そのような中、企業の皆さんに応援していただき、2012年8月1日から、市内に無料簡易宿泊施設をオープンすることができたことは、本当に嬉しい。布団を借りて宿泊することができるだけの簡素なものだが、ボランティア活動にとっては大きな助けになっている。

被災児童に関する取り組みとしては、大使館やNPOなどのご支援をいただき、アメリカ軍基地に中学生を送って、ホームステイさせていただくという活動を行っている。被災した子供たちが将来に向かって夢を追い続けるために、自分の可能性を探ることができるような取り組みがなければ、彼らは夢をあきらめてしまうかもしれない、という問題意識が私にはあった。私自身にアメリカ留学経験があることも手伝って、子供たちの将来につながる取り組みとして、英語に親しませようと考え、発案したものである。地元の中学生を米軍横須賀



写真6 ボランティアの様子

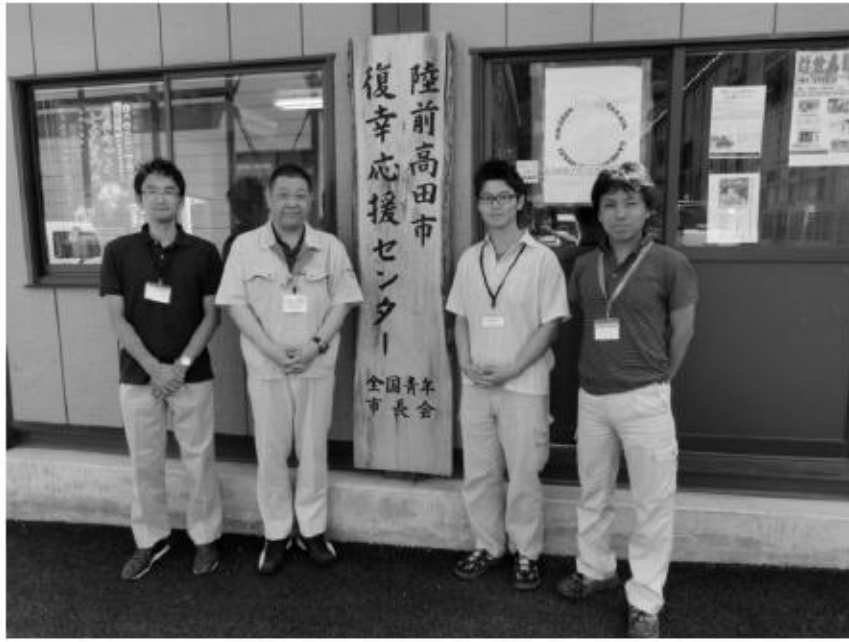


写真7 全国青年市長会

基地に訪問させる取り組みを皮切りに、2012年の夏休みには被災地の高校生を本土に連れて行ってもらっている。今後は、このような取り組みをもっと広げていきたい。

被災直後から、多くの自治体から支援をいただいた。特に、全国の若手の市長が集まる連合会「全国青年市長会」の会員自治体からは、現在

も多くの支援をいただいている。陸前高田市の物産や復興支援グッズを各地のイベントで販売していただいたり、各自治体の職員に陸前高田市役所に常駐してもらい、公平性の関係で陸前高田市が取り扱うことができないような仕事を代行してもらったりと、大きな心の支えになっていただいている。

また名古屋市からも、職員をお借りしたり、市民のみなさんには被災児童たちの社会見学に協力いただいたりなど、あたたかい支援をいただいている。

3 復興のかたち—世界に誇れる美しいまち

私が陸前高田市長として考える、復興の一番のコンセプトは、「世界に誇れる美しいまち」である。

2万人弱しか人がいない、災害がなければ誰も聞いたことがなかったようなまちが「世界に誇れる」など、笑われてしまうかもしれない。しかしこれは逆転の発想で、世界中の皆さんから注目され、応援されている今こそ、「どこにもないユニークなまち」「田舎のまちでもきらりと光るまち」をつくらなければならないのである。

「世界に誇れるまち」の一例として、私はバリアフリーのまちを挙げたい。

私がアメリカに留学していた頃、感心したのは、身体に障がいのある方が不自由なく生活できているという点である。アメリカでは、スーパーマーケットでも、図書館でも、夜の繁華街でも、自由に楽しそうに生活しているのが当たり前である。

日本ではそれができているだろうか。自由に生活できているだろうか。日本では、間口が狭くて車いすが入れない店、盲導犬お断りの店はまだ多い。市街地全体のバリアフリー化は、インセンティブや費用の問題から、なかなか進まないのが現状である。

陸前高田市は市街地が根こそぎなくなってしまったからこそ、こういった抜本的な改革ができるチャンスともいえる。「ノーマライゼーション」が叫ばれる今、そういった言葉が必要のないまち、どんな人でも安心して生活できるまちに再建するのが、一つのアイデアである。身体に障がいのある方が、生活に困難を感じたときに、「陸前高田なら安心して生活ができる」と思って移り住んで来るようなまちにできればよいと私は思っている。

*

今回の復興では、10年も時間をかけて当たり前のまちを作るのではいけない。私は、5年で素晴らしいまちに復興して、日本人の底力を、世界に見せたいという夢がある。

私は、政治家は夢を語らなければいけないと思っている。このような困難なときこそ夢を語ることで、このピンチをチャンスに変えることができると私は信じている。

「世界に誇れる陸前高田市にしたい」という夢を、私は実際に形にしていくことを約束する。いつの日か皆さんを素晴らしい陸前高田市にお招きできるよう、これからも頑張っていくつもりだ。